

【目的】現代社会では社会機構の分化が極めて進み、家庭生活は金銭を媒介として必要なモノ・情報・サービスなどを手に入れることによって運営されている。今日、家庭生活の健全な管理運営を計る上で金銭に対する正しい認識と対処は、必要不可欠なこととなった。本研究では、ヒトが生まれてから人間社会の中で育つなかで、どのように金銭について及びそれに代表される社会機構について認識を発達させていくのか、そのみちすじを明らかにしたいと考えた。

【方法】質問紙調査法。対象者は、群馬県内の公立小学校2年生、5年生、中学2年生、高校2年生、の4群で計1003名である。質問項目は①『お金』に対する感じ方・捉え方について（感覚面）②『お金』にかかわる行動について（行動面）③将来展望（職業選択）と『お金』の関係について、である。調査時期は平成元年9月～10月である。

【結果】①『お金』と聞いて思いつくことは「欲しい」「ちょうだい」などの羨望を伴う反応が多く、特に小学生及び郡部でその傾向が強い。『お金持ち』の刺激語に対しても「いいな」「なりたい」が多く、年齢上昇とともに「社長」「お坊ちゃま」などの人の記述と「けち」「欲張り」などの批判を伴う反応が増加する。『お金で買えないもの』は「いのち」「人間」が最も多く、中学生・高校生では「愛」「こころ」も多い。②自分一人で買い物に行く時の所持金額は年齢上昇とともに上昇し、郡部の中学生・高校生では両極分化傾向が見られる。③将来の職業選択にあたっては、「もうかるから」「給料がいいから」は各群で7-9%見られ発達段階による差は認められないが、男子に有意に多い。